

第 59 回 歴史探訪の会

「神戸・須磨で源平合戦と源氏物語ゆかりの史跡を歩く」

実施日：2017 年 11 月 15 日(水曜日)

場所：神戸市 須磨区

案内人：澤田謙治

コース：JR 須磨駅～村上帝社～関守稲荷神社～現光寺～平重衡捕らわれの松跡～須磨寺～
須磨寺公園(昼食)～松風村雨堂～網敷天満宮～JR 須磨駅

秋らしい晴天に恵まれましたが、当日朝におきた大阪環状線の車両故障の影響により、急遽近鉄～阪神直通電車を利用された方、乗換駅で走って電車に乗り継がれた方、頑張ったけれど少し遅れた方、とちょっとしたハプニングがありましたが 14 名の方に参加頂き、須磨歴史倶楽部のガイドさんの案内で JR 須磨駅をスタート。

須磨は西国と畿内を結ぶ要地にあり、奈良時代には須磨の関がおかれ、平安時代には「源氏物語」に見られる様に貴族の隠棲の場所にもなりました。平安時代末期には源義経による“逆落とし”で有名な源平合戦(一ノ谷の合戦)の舞台にもなりました。江戸時代には西国街道を多くの人が往来し、松尾芭蕉や与謝野蕪村等が須磨を訪れた記録が残っています。

尚、須磨の地名の由来は、六甲山系の西端の鉄拐山や鉢伏山が海の近くまで迫り平地の「スミ」にあたる事、山の西で垂水区との境を流れる境川が古くは摂津と播磨の国境であった事より隅っここの「スミ」が訛って「スマ」になり色々な漢字が当てられたようだが現在の「須磨」になったとの説があります。

【村上帝社】

平安時代の末期、琵琶の名手であった藤原師長は唐にわたって琵琶の奥義を極めたいと思い、都を発った。須磨まで来た夜に村上天皇と梨壺女御の霊が現れ琵琶の奥義を伝えたので、唐に行く事を思いとどまり琵琶の名器「獅子丸」をここに埋めて都に帰っていったと言い伝えられている。
この伝承に基づいて土地の人が村上天皇を祀ったとされる。能の「絃上」はこの伝承を題材にしたものの。藤原師長が琵琶を埋めたという琵琶塚は一部が山陽電鉄の線路脇に残っている。



村上帝社、すぐ後ろには山陽電鉄が走っている

【関守稲荷神社】

関守稲荷神社はこの辺りにあった「須磨の関」の守護神として祀られたと伝えられています。

「須磨の関」は大宝令に定められている摂津の関の事で、天下の三関(伊勢・鈴鹿の関、美濃・不和の関、越前・愛発(あらち)の関)につぐ重要な関でした。境内には百人一首で知られる源兼昌の歌碑があります。

「淡路島 かよふ千鳥の 鳴く声に 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守」

百人一首 第78番

須磨の関があった場所については、諸説あり今回訪れた源光寺がある場所や、多井畑(今回訪れたところから北の山の方角)とも言われています。



【現光寺】

正式な名称は藩架山現光寺(ませがきさんげんこうじ)。須磨の地には真言宗の寺院が多いなかで浄土真宗・本願寺派のお寺は珍しいとの事。「源氏物語」の須磨の巻の舞台と伝えられていることより光源氏の住居跡と言われ元は源氏寺とも呼ばれていた。江戸時代には松尾芭蕉がこの寺に泊まったと言われ、境内には三段切の名句、「見渡せば眺むれば見れば須磨の秋」の句碑が残っている

明治の初め頃、境内の裏手から「川東左右関所跡」という文字が刻まれている標石が掘り出され、この近くに「関の一画を示す垣」の意と考えられる「藩架(ませがき)」とか、「やぐら」とい地名が残っていることからこの辺りに須磨の関があったとも言われています。



現光寺本堂



須磨の関跡の刻まれた石碑 (複製)

【平重衡捕らわれの松跡】

山陽電鉄の須磨寺駅を出てすぐの所に「平重衡捕らわれの松跡」があります。1184年の一ノ谷の合戦で源範頼（源頼朝の弟、義経の兄）の軍と戦った平重衡（平清盛の五男）は戦いに敗れ、退却をしようとしたが範頼の郎党に生捕りにされた。捕えられた重衡は近くにあった松に腰をかけて無念の涙を流した。これを見た村人が哀れに思い濁り酒を差し出したところ重衡はたいへん喜び『ささほろや波こことを 打ちすぎて すまでのむこそ濁酒なれ』と詠んだと伝わっています。平重衡はその後鎌倉に送られたが、重衡により焼き討ちされた南都の強い要求により南都に引き渡され、木津川の畔で処刑されています。



平重衡捕らわれの松跡を示す石碑

【須磨寺】

真言宗須磨寺派の本山で、正式名称は上野山（じょうやさん）福祥寺ですが一般的に須磨寺と呼ばれています。平安時代に漁師が和田岬の沖で見つけた聖観音像を聞鏡（もんきょう）上人がこの地に移したのが始まりとされています。一ノ谷の合戦で熊谷直実に討たれた平敦盛愛用の「青葉の笛」、平敦盛首塚（胴塚は須磨浦公園にあります）、弁慶の鐘、義経腰掛の松等源平ゆかりの重宝や史跡があります。又、境内には松尾芭蕉、正岡子規など文人の句碑、歌碑等があります。



<平敦盛について>

平清盛の弟、経盛の末子で笛の名手と伝わる。愛用の「青葉の笛」は敦盛の祖父平忠盛が鳥羽上皇から賜ったものと言われる。一ノ谷の合戦で源氏方の熊谷直実に討たれるが、直実は敦盛が我が子と歳の変わらぬ若武者であった事から一度は見逃そうとするが、泣く泣く敦盛を討った。直実はこれをきっかけに出家したと言われる。能や幸若舞の「敦盛」は平家物語にある敦盛と直実のやり取りを題材したもので、幸若舞「敦盛」では織田信長が好んだ『人間五十年下天のうちは比ぶれば夢幻の如くなり一度生を享け滅せぬもののあるべきか』という一節がある。



須磨の浜での平敦盛と熊谷直実の出会いを再現（左が平敦盛、右が熊谷直実）



源義経が平敦盛の首を検分する際に首を洗ったとされる池



平敦盛の首塚（胴塚は須磨浦公園にある）

【松風村雨堂】

平安時代の公家で、歌人でもある在原行平(在原業平の兄)が光孝天皇の不興をかい須磨に左遷された際に多井畑の村長の娘「もしほ」と「こふじ」に出会い、二人を「松風」と「村雨」と名付けて愛しました。行平が都に戻った後も二人は行平を慕い続けて庵を結び行平の無事を祈ったといわれ、現在のお堂がこの庵の跡と伝えられています。行平の帰京の際に狩衣を掛けたという衣掛松、行平が植えたといわれる松、行平の歌碑や「松風」と「村雨」の五輪塔があります。

在原行平は須磨に住んだ頃、須磨の浜辺に流れ着いた板に弦を一本張った一弦琴を作ったと言われる。須磨琴とも呼ばれ、須磨琴保存会によって演奏会も開催されています。

「立ち別れ いなばの山の峰におふる まつとし聞かば今かへりこむ」

百人一首 第 16 番

【綱敷(つなしき)天満宮】

菅原道真が大宰府に左遷される途中、風雨を避けるために須磨に一時上陸した際に、土地の漁師達が漁網の大綱で円座を作り休息して頂いたとの言い伝えがあります。境内には、綱敷の円座、願いを叶える「なすの腰掛」、5 歳の菅原道真公の像、菅公母子像、サーフボードを持った道真公があります。



綱敷天満宮正面



「波に乗る」事が出来ます様に。。



菅公母子像



須磨寺 源平の庭前で

須磨歴史倶楽部のガイドさん、ありがとうございました。

○次回(2018年1月17日の予定)は京都・淀城跡と石清水八幡宮を訪れます。

○写真は田原さん、岸場さんが撮影されたものを使用させて頂きました。